

ボーダレス時代と個の確立

—いま技術者に求められるもの—

常務取締役

佐藤 太英

Motohide Sato
Managing Director



高度情報化技術の目覚ましい進展にともなって、世界中の人々が同時刻に、しかも容易にいろいろな情報を共有化できる世の中となった。

この結果、ベルリンの壁に象徴されるように、社会主義国家の民主化への激動は東西間の境界をあっという間に取去ってしまい、新たな世界秩序の確立に向けての蠢動があちこちで始まっている。また、ヨーロッパにおけるECの市場統合、EUへの変容、北米大陸におけるNAFTA、アジア・太平洋を中心としたAPECの動きなどは、国家としての境界を取り払ったより大きな地域圏としての秩序づくりを目指しているものであり、一方では、CO₂、酸性雨に端を発した地球環境問題などのように、いやが応でもグローバルな視点で物事を考えざるを得ない時代となってきている。

このようなボーダレスへの動きは単に国家間にとどまらず、我々の身近なところでも確実に進展している。たとえば、24時間ストアや24時間テレビなどによる昼夜間差の減少、男性の女性化やキャリアウーマン・オジギャルなどの出現による男女差の接近など、まさにボーダレス時代の到来である。

しかし一方では、ユーゴスラビヤやモザンビークなど各地域で勃発している民族国家樹立のための局地的な紛争のように、新たに個を確立するための激しい動きもある。このような細分化に向う動きは、やはり身近なところにもあり、個性的ライフスタイルの重視、価値観の多様化、ファッションの個性化などはその好例と言えよう。

この二つの現象は一見矛盾しているかに見えるが、改めて境界というものの存在を考える時、昨今のボーダレスへの動きは決して均一化、均質化をめざすものではなく、ボーダレスになればなるほど、個の確立が重要となることに気づかされる。アイデンティティがなければボーダレスの時代に存在する価値がなくなってくるのである。

このような時代背景にあって、いま我々技術屋に求められているもの、それは学生時代にお世話になったあのT定規のように、自分の専門分野についてはどこまでも深く根を張り、その上で少しずつ異分野にも幅を拡げ、そしてやがては三角定規のようになるよう日々研鑽を重ねることではなかろうか。

いわゆる技術屋は、ややもすると自分の専門分野に閉じ籠り、身の回りに境界を作ってその中でそれなりの成果をあげて満足してしまう傾向が強い。しかし、そのような態度では、これから21世紀へ向けての大型技術開発はとても実現できない。例えば、素粒子物理におけるSSC実験、生物学における遺伝子組み替え技術、あるいは医学における臓器移植などは、学者、医者、技術者だけの問題ではなく社会、経済、さらには倫理の問題までクリアしなければ成功はおぼつかないのである。そこには、国際、学際、業際といったボーダラインはなく、国を越え、各分野を越えたあらゆる分野のネットワークが必要である。すなわち、技術だけが幾ら進んでも、それが社会に受け入れられ、人類にとって有用なものにまで高められなければ意味がない。そのための粘り強いPA活動もまた、技術者の役割として期待されているところなのである。

19世紀末、電気が初めて明りを灯した時、その画期的な技術は人々から不思議がられ、恐れられ、危険扱いをされながら、長年にわたる先輩技術者の努力によってようやく信頼されるようになり、今日を迎えることができた。目下開発中の巨大技術も、始めは大衆のアレルギー反応や不安感からの反対運動などに遭遇し、苦難の道をたどることが予想される。このことは現在の原子力発電論議からも容易に推察できることである。

今、技術者に求められているものは、自分の専門技術に裏打ちされた個の確立と、積極的に社会と深く関わっていかうとする気概そのものではなかろうか。